

命めぐる技術 どう付き合う

出生前診断・iPS細胞

新しい出生前診断やiPS細胞(人工多能性幹細胞)など「いのち」を巡る画期的な技術に注目が集まっている。急速に進む技術革新は、倫理や安全性という制約を乗り越えようにもみえる。何を考えるべきなのか。

新しい出生前診断は、血液検査によって、子どもがダウン症かどうかを「高い確率」で診断できる。ただ「命の選別」という問題が残ると批判が根強い。

立岩真也立命館大教授(社会学)は「こんな子どもが生まれてきてほしいという親の願望があるのは普通だ。でも、それが完全に満たされるべきだと認められているわけではない。根底には、誰も他人のことを決めてはならないという規範がある」と指摘する。立岩さんが注目するのは「子どもは授かりもの」

新しい出生前診断

妊婦の血液に含まれる胎児のDNAを解析し、子どもがダウン症かどうかを判定する。おなかに針を刺して羊水を調べる従来の方法に比べ、安全性が高い。国内でも近々、臨床研究という形で始まる。

iPS細胞

皮膚や髪の毛などの細胞に特定の遺伝子を導入し、体の色々な部分の細胞に変化する能力をもたせたもの。例えば皮膚の細胞から神経細胞や血液細胞などが作り出せるため、再生医療や新薬開発への応用が期待される。受精卵から作られるES細胞と同様に「万能性」を持つ。

他者の「あり方」に介入する危うさ／次々生まれる問い



平川秀幸氏



ハーバーマス氏



立岩真也氏

今年ノーベル医学生理学賞の授賞につながった山中伸弥京都大教授の功績はiPS細胞の作製だ。生命の萌芽である受精卵を潰して作られるES細胞(胚性幹細胞)に比べて倫理的なハードルが低いとされ、ES細胞研究には反対するローマ法王庁も研究を歓迎する。体の色々な組織に変化できる「万能性」はES細胞と同じだ。

思想家ユルゲン・ハーバーマスは「人間の将来とバイオエシックス」(2001年)で着床前診断などに言及。遺伝子レベルで生命の質に介入する技術は「規範的構造をもった我々の生活形式を掘り崩す」と述べ、現代社会に取り返しがつかない影響を与えると警鐘を鳴らした。

記者の三島憲一東京経済大教授(ドイツ思想)によると、ハーバーマスは、伝統や宗教的な規範が弱まった現代、私たちが従う規範の根拠は対等な市民のコミュニケーションから生み出すしかないと考えたという。

遺伝子レベルの介入が問題になるのは「他人が、ある人間の『あり方』を決めることにつながってしまう」からだ。「例えば、子どもは親から強く影響を受けても、成長するなかで自由で対等な関係を作れる。だが、生命の質を誰かに決められると平等な関係は損なわれてしまう。ハーバーマスが指摘して10年以上たつが、問題は同じだ」

だが、技術の発展が止まる気配はない。

生命倫理に詳しい科学ライター 粥川準二さんは「結局、起こりうることを具体的に考えて、一つずつ決めていくしかない」とみる。例えば、iPS細胞が実際に医療現場で使われるようになった時、経済的条件の違いで、危害や負担を被ることがない仕組みをどう作るか。提供した人の遺伝情報が残るiPS細胞はどういう範囲で利用が許されるのか。「問いばかりが生まれ、決まる前に次の技術発展がやってくる」

難問をどう解いていくのか。一つの手段は、震災後の国のエネルギー政策を決めるのにも持ち出されている「熟議」だ。一般市民と専門家が、議論すべきことは何かという根本的な問いから、時間をかけて話し合う。

再生医療でのiPSの実用化はまだ先のようなから、それだけの時間は十分ありそうだ。

平川秀幸大阪大教授(科学技術社会論)らの研究グループは再生医療を巡る熟議を2010年、全国16カ所ですべて1年間にわたって繰り返した。市民や専門家ら計180人が参加した。

平川准教授は「何を倫理的な問題とするかは、人や属性によってかなり違った。他の人が何を問題と感じたり、考えたりしているのかを知る時は専門家にも不可欠。そうした過程が、決めるためには必要だ」と話す。

(高久潤)

